表す　感じる　かほく防災記者 リポート

助け合いの大切さ学ぶ

「防災・減災と応急救護のワンポイントレクチャー」

東日本大震災の教訓や災害への備えを学び、発信するかほく防災記者の中学・高校生４人が８日、仙台市青葉区の仙台国際センターで開かれた仙台防災未来フォーラム２０２５のワークショップ「防災・減災と応急救護のワンポイントレクチャー」に参加した。

毛布を使った搬送のこつの説明を受けるかほく防災記者ら

仙台市減災推進課が企画した。阪神大震災では、倒壊家屋などの下敷きになった人の８割近くを家族や隣人が救出したことや、能登半島地震では適切な応急手当をしていれば助かった命があったことを学んだ。

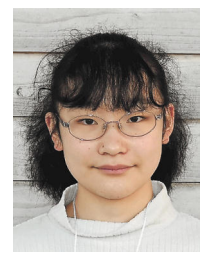
職員と、東北や北陸の大学医学部の学生団体「災強のすけっと」のメンバーが寸劇で、地震発生直後の住民による救助と、応急手当ての重要性を紹介した。

中高生らは、骨折が疑われる被災者役の患部を傘や雑誌、ガムテープで固定したり、ガムテープの代わりにビニールひもやネクタイを使ったりして応急手当てを体験。両端を丸めて持ちやすくした毛布で、被災者役の搬送にも取り組んだ。

家具転倒防止用突っ張り棒などが景品のクイズもあり、中高生らは仙台市の救急隊数（正解は29隊）、長周期地震動の震度階級（４段階）など、防災減災の知識を問う難問に挑戦した。

同課職員で仙台市防災・減災アドバイザーの早坂政人さんは「災害時、応急手当てはもちろん、住民同士の助け合いが大切なことを伝えたかった。地域で家族が集まる場所や防災倉庫の位置を確認するなど、学んだことを行動に移してほしい」と期待した。

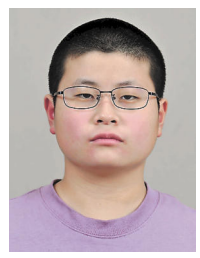
手当て 身近なもの代用



物資や公助が届かないような大災害が起きたら、命を守るために自助と共助、応急手当てが重要になると学んだ。応急手当ては包帯や三角巾がなくても、傘やガムテープなど身近なもので代用できた。周囲の人たちとのネットワークを広げ、手当ての方法を伝えたい。

（仙台青陵中等教育学校５年　高橋杏奈さん　17歳）

学んだこと生かしたい



災害が起きたとき、どのような状況になるか予測が付かない。ワークショップで学んだ応急処置や搬送方法などを、災害時に実践できるようにしたい。クイズは住んでいる仙台市の救急隊が29隊あること、耐震化率が約90％ということなどが分かり、勉強になった。

（仙台青陵中等教育学校２年　清野智優さん　14歳）

地域で日頃の訓練大事

大規模な災害が起きてけが人が多数出た場合は、救急隊が対応できない可能性があると知った。多くの人を助けるためには、自分たちが心肺蘇生法や応急手当て、倒れた建物からの救出を行う必要がある。共助と地域で日頃から訓練することが大事だと再認識した。

（仙台市七北田中２年　高橋彩葵さん　14歳）

公助届かずも協力して

寸劇や実技を通して共助の重要性を身をもって感じた。40キロ弱の負傷者を模した人形の運搬は複数人でも容易ではなかった。公助が届かなくても、人々が協力して正しく応急手当てができれば、救える命があると知った。災害時、私もできる限りの救助を行いたい。

（仙台二華中２年　大津美海さん　14歳）